

被災障害者 絆で支える

施設職員有志「チームスリー」

横浜市内で知的障害者らの支援に携わる施設職員有志でつくる「TEAM3」（チームスリー）が、熊本県や茨城県など、地震や水害で被災した小規模な障害者事業所、団体などの支援を行っている。金銭面だけでなく、現地調査や被災地の事業所の仕事づくりに関わるなど、独自の活動を展開。その経験を、横浜での災害対策にもつなげている。（尹 貴淑）

小規模事業所へ独自支援

チームスリーは、東日本大震災をきっかけに横浜市障害者地域作業所連絡会、同障害者地域活動ホーム連絡会、同グループホーム連絡会、障害者支援センターの職員有志が結成した。メンバーで、戸塚障害者地域活動ホームしもこう施設長の甘糟直行さん（45）は、「工場や原発の被害情報は発信されたが、障害者の情報はなかなか出なかった。誰がどこで困っているか、何が必要かは分からないが、まずは寄付を集めた」と話した。被災地の事業所では、人手やネットワークがあるが、「災害時は、小規模事業所ほど孤立してSOSも出せない」と甘糟さん。被災地の事業所では、人手やネットワークがあるが、「災害時は、小規模事業所ほど孤立してSOSも出せない」と甘糟さん。被災地の事業所では、人手やネットワークがあるが、「災害時は、小規模事業所ほど孤立してSOSも出せない」と甘糟さん。



被災地で行われた聞き取り調査の様子（TEAM3提供）
活動について講演する甘糟さん（横浜市栄区）

それらの活動を通じ、日ごろから地域とつながることの重要性も実感した。知的障害をはじめ、一見するだけでは分からない障害は、認知されることが難しい。重要なのは、「地域に障害のある人がいて、事業所があることを知ってもらうこと」とだという。災害対策や防災は、地域連携を生み出すきっかけにもなる。「ネットワークこそライフラインになる。それをどう築くかが、一番の災害対策になる」と話す。